

かい  
邂

こう  
逅

齋 藤 實 則

## プロローグ

辞書に「邂逅」を（人生における）めぐりあいとも解説している。私の場合、よき師との出会いによって、充実した研究生生活を全うすることができた。

そのなかで、四人の碩学（尾留川正平・渡辺萬次郎・渡辺武男・板倉勝高）についてのかかわり、印象などについて記すこととする。

### I. 尾留川正平先生

昭和31年、私は県立湯沢北高等学校に勤務することができたが、毎年学会に参加し、学問的雰囲気浸るよう努めた。そして、若干でも調査資料がまとまると、それを学会で発表するように心掛けた。

昭和33年、私は仙台市（東北大学）で開催された日本地理学会秋季大会で、「雄物川上流部の地主の成立過程」について発表した。そのときの座長であった、東京教育大学の尾留川正平先生から直接コメントを頂くとともに、後日、再会して下さることの約束を頂いた。

二・三週間後、私は秋田市で開催された、先生を囲む会に出席した。そこで先生がかつて奉職された秋田師範学校で、県立湯沢北高等学校長の佐藤竜三氏と同職されたことが判明した。先生は即座に佐藤竜三校長宛に紹介状をお書き下さった。

翌年、佐藤竜三校長は現教育研究所長に栄転、県教職員内地留学選定委員になられた。このような経緯が幸いして、昭和34年、私は東京教育大学・尾留川研究室に内地留学することができた。

内地留学期間中、先生のお宅に挨拶に参上、秋田の話をしているうちに、先生が秋田師範学校に勤務当時（独身時代）の下宿先（秋田市保戸野中丁 渡辺よし宅）に、私も学生時代に下宿していたことが判明した。以後、上京する度毎に、先生のお宅に伺い、奥様からも歓待され、秋田の話に花が咲くのが常であった。しかし、内地留学期間中、先生の学問・研究に対する指導は厳しかった。私は「横手盆地の養蚕業」をテーマに報告文をまとめようとしていたが、原稿は幾度書き換えても付き返された。悔しい思いをしながら、夜

を徹して書き改めた浄書原稿に、容赦なく朱が入り、書き換えは十数回に及んだ。しかし、これが私の書いた報告文のなかで、論文らしい内容の最初のものであった。

3カ月間の内地留学が終り、帰秋する直前に、先生から今後の研究テーマに「鉱業」を選んではその示唆を与えられた。

秋田県はわが国を代表する鉱業県であり、当時、六十余の鉱業所が稼動していた。湯沢市の近隣にも、歴史的に由緒のある、院内・松岡・吉乃・田子内・白沢など十指に余る鉱山が存在していた。まず手始めに、増田町にある大日本鉱業株式経営の吉乃鉱山を対象に選んだ。

鉱山研究を進める場合、当然のことながら、地質鉱床・岩石鉱物・鉱業技術に関する専門知識や業界用語の理解が必須の条件であり、素人の私には難解と思えることが多かった。それでも父・實徳と義兄・高橋正美（通産省鉱業課勤務）から手ほどきを受けることができたのは幸であった。

2年間の調査でかなりの資料を収集でき、その内容を昭和35年日本地理学界春季大会で発表した。同地理学会でも、鉱業に関する研究・発表者は極めて少なく、私の発表内容が拙いにも拘わらず、関心を寄せて下さる会員も多く、なかには激励して下さる大先生（石田竜次郎・飯塚浩二）もおり、また、雑誌『地理』への投稿をお世話下さる方（鴨沢巖男）もおられ、恐縮した。

後年、尾留川先生は筑波大学に移られ、日本地理学会長の要職に就かれた。それでも多忙のなか、よく秋田市に足を運ばれ、私共の指導に当って下さった。ある年、湯沢市で先生の講演会を開催したところ、公民館の講堂は満員になり、熱気に溢れた。講演終了後、地元市町村民から減反・出稼ぎ問題について鋭い質問が続いた。先生は国際的視野から格調高くお答えになられ、多くの聴衆に感銘を与えた。このことは湯沢市民にとっても誠に印象に残る出来事であった。

## II. 渡辺萬次郎先生

私が鉱山調査を開始したところ、わが国の鉱山研究の権威者といわれていたのが、秋田大学長・渡辺萬次郎先生であった。※1

※1 私が初めて渡辺先生の警咳に接したのは、昭和30年度の秋田大学の卒業式に参列した時で、その告辞の中で、「…高嶺の頂を究むる道は、堅実な一步一步の「不屈不撓の連続によってのみ踏破されます。もし、小径で人に逢ったら、無反省に追随したり、押し倒して進んではなりません。一時は路傍に身を避けても、諸君自身の信念の下に、堅実な歩調を保って頂き度い……。」と話された先生の言葉を、今でも誦して、座右の銘としている。

私は非礼を顧みず、鉱山資料について問い合わせをしたところ、昭和36年8月26日、渡辺学長から現金入りの封筒が届いた。流石は学長、研究助成金を下さったと早合点し、お礼に伺ったところ、実は支払いの送付先が誤って届いたものであったことがわかったのだが、「お礼を言われたのに返せともいわれなし」とのお言葉に恐縮した。しかし、このことが縁になり、渡辺学長からは、直接、鉱山研究について手ほどきを受けるとともに、教育問題・人生論についても高邁なご意見を拝聴できた。さらに、後年、鉱業研究の泰斗（渡辺武男・梅津良之秋田大学長）を紹介頂いた。

渡辺学長は心の優しい方で、『筆運び 筆にあきつの止り来て 運び兼ねたる 秋の日もあり』の和歌からもうかがうことができる。※2

※2 渡辺先生は文才豊かで、数多くの著書があるが、昭和8年頃執筆されたSF小説中、私の手元にある「テレビジョン時代」「三大官の怪死」などのトリックは、今にして、ビデオテープ・放射能汚染などで謎解きが可能であり、先生の着想力の凄さに恐ろしさを感じる。一方、誠に機知に富んでおられ、ある年の3月、身内の受験生に手心を加えてもらおうと、学長室に訪れた某政治家に対して「ああ、いいですよ。成績が良ければ入れてあげますよ。」とすましておられた。偶々、同席していた筆者も啞然とした記憶がある。

しかし、権力者に対しては一步も退かぬ胆力を示されることもあった。そこが、学者・研究者・学生達から人気のあった所以であろう。

研究については、その重要性を指摘されながら、日常生活が乱れたり、本業を疎かにしてはならぬと諭された。

県立秋田南高等学校在職当時、私は手形西谷地にある学長公舎によく参上した。学長室と公舎に所蔵されている、渡辺先生の文献・資料は莫大であった。それ以上に鉱業に関する先生の知識は底知れないものがあつた。そこで、先生とご相談のうえ、歴史的な大鉱山である院内銀山に取り組むことにした。

研究は、関係資料の収集と現地視察から始まった。しかし、難解な鉱山用語、古文書の読解の困難さ、資料の閲覧を渋る旧家の老人への対応など、調査は難渋した。それでも3年の日時を費やして、漸く、藩政時代以来の「院内銀山」の輪郭を捉えることができ、その内容を学会で発表するとともに、学会誌に投稿した。

昭和42年、渡辺先生は秋田大学長を退任、仙台市の自宅で自適の日々を過ごされることになった。丁度、この年県庁鉱務課から、秋田県鉱山誌の執筆依頼があつた。資料と愚稿の一部を携え、日帰りで仙台市上杉のお宅に伺った。また、東京・仙台で開催された学会出席の度毎に先生宅にお寄りし、宿泊もさせて頂いた。先生の日記帳には、『上京の折りは必ず寄るといふ 文をたよりに 幾日をぞ待つ』と記されていた。

件の『秋田県鉱山誌』は、先生の加筆された部分が光彩を放っている。秋田県鉱山史のバイブルという人もいる。奇しくも今年改訂版が刊行されることになっている。

### Ⅲ. 渡辺武男先生

秋田大学4代目学長・渡辺武男先生を紹介下さったのは渡辺萬次郎先生であった。渡辺先生が秋田大学長として就任間もない頃、泰山荘で引き合せ頂いた。それは地質学者数人による歓迎夕食会で、狩野豊太郎先生（県出納長）も同席されていた。板倉先生流にいうならば、紹介の筋が良かったということになるろう。

当時、渡辺先生は日本学士院会員、日米科学者会議委員などを務められていた大物学長であった。人間的には物腰の柔らかい紳士で、他人の話をよく聞かれ、静かに話される方であった。

このことが縁で、私は県立秋田高等学校勤務当時、定期的に学長室に参上し、秋田県の鉱業界の動向、秋田県・秋田市の地理的環境などについて報告申し上げるとともに、渡辺先生からは研究・教育についてご意見を承った。

鉱山調査には、直接同行させて頂き、宿舎でお酒を頂きながら、公害問題についての視点や対応の在り方についてご指導頂いた。また、日米科学者会議での話題、将来のエネルギー（核融合）、環境問題、科学と宗教など話題は尽きることなく、来客を待たしても気にされることなく学長室で悠然とされていた。※3

※3 ある時、高校教師からみた大学改革案について質問されたことがあったが、私には渡辺先生の真意がよく理解できなかった。また、学位はいつでも取れるから、鉱山資料収集が急務であり、佐藤信淵の「山相学」をテーマとするならば、先生自身協力しましょうと行って下さった。

東京都練馬区大泉の渡辺先生の自宅や、怪我で秋大医学部付属病院特別室に入院された時、ご家族の方々と懇談できたのも楽しい思い出である。（※奥さん・娘さんに遣り込められた時でも、笑を絶やさず、頷かれている様は、大人はかくあるべきかなと今更ながら教えられ、反省させられた。）

渡辺先生は切手収集家としても有名であり、先生宅に伺った時、貴重なハンガリー地質学会記念切手1シートを下された後、希望する切手をもう1枚あげましょうといわれた。この時、私は痛恨（愚劣）の一言を申し上げたのである。「高価な切手を」と、渡辺先生はやゝ考えておられたが、やがてドイツの第一次世界大戦後の超インフレ時代の200万マルク（額面1.4億円、市販価格2,000円）を下された。この記念すべき切手は今も手元に保管してある。

また、渡辺先生を拙宅にお招きした時は、鎌田重光氏と三人での話が盛り上がり、12時過ぎてもお帰りになろうとはされなかった。

渡辺先生からも、数多くのことをご指導頂いたが、印象に残っている語録に、『学長職に専心しろという人がいるけれども、それは真の行政官ではない。私は研究を続けているからリーダーシップをとれるのです。』『人間は肝心なとき No といえなければなりません。それは大変勇気のいることですが。』『学位などはいつでもとれます。それよりも、もっと価値のあることをやってみませんか。』などがある。

#### IV. 板倉勝高先生

板倉先生と私の出会いは、昭和30年代前半、岡山市で開催された日本地理学会秋季大会で、偶々旅館に同宿したことに始まる。先生が都立神代高校に勤務されていた頃である。先生は日本の工業について熱っぽく語られたことを思い出す。私が日本地理学会春季大会（東京都）で発表した頃は、信州大学に勤務されており、よく会場に顔を出され、発表後コーヒーを飲みながら、コメントと励ましの言葉を下さった。また、雑誌『地理』への投稿を勧められた。それが「東北の“灘”湯沢」であった。

昭和52年、板倉先生は流通経済大学から東北大学理学部教授に就任された。迂闊にも、私は先生が教授になられたことを知らず、従来通りの交際をしていた。新年度早々、東北大学地理学生の巡検があり、子安温泉の旅館を世話してくれとの連絡があり、太郎兵衛旅館を紹介したところ大変な歓待であったという。その年の東北地理学会春季大会で発表後、先生車で仙台市内まで送って頂いた。車の中で「教授になったら、急にぺこぺこする人間がおり、いやになっちゃうよ。」とのお話に、吃驚仰天、今更お祝い申し上げるわけにもいかず、従来通りご助言を頂くことにした。

昭和54年、定住圏構想が浮上し、秋田県米代川流域が指定対象となった。地理学の分野で報告書をまとめることになり、板倉先生が座長で、阿部隆氏と私が委員に選ばれた。2泊3日の現地調査の折、私達は宿舎で割当原稿を消化すべく、執筆に専心していた。朝、先生の部屋に伺ったところ、静かに「ヘルマン・ヘッセ集」を読まれていた。

その後、仙台市で先生にお目にかかった折に、論文を提出されたらとのお話があった。顧みるに、鉱山調査を始めて20年、これまでご指導・ご援助を頂いた各位に、長年にわたって研究生生活を支えてくれた方々と家族に対して感謝の気持ちを込め、また、己の生きた証として、学位論文に挑戦する決意を心密かに固めた。

当時、私は県立秋田高等学校に勤務していた。教育は教師自身が学習する姿勢を生徒に伝えることしかないとの信念で生徒に接していた。担当した生徒の殆どが、所謂一流大学を目指していた。これらの俊秀に負けじと、休日は勿論のこと、平日も夕食後の数時間は、論文の構想を練りながら、文献・論文の読破と収集資料の整理に当った。

秋に入ってから、「都市の形成と消滅の要因—鉾山集落の栄枯盛衰を例として—」のテーマのもと論文執筆に当たった。そして、論文の審査と試験にパス、東北大学から理学博士の学位が授与されることになった。2月28日、学位審査にパスした旨、渡辺萬次郎先生に報告、先生に喜んで頂いたが、これが先生との最後の会話となった。3月20日、渡辺萬次郎先生ご逝去の連絡を受けたが、私の誕生日でもあり、奇しき縁と思った。

板倉先生は信州短大に移られてからも熱い温かい目を向けられ、いつも私達を励まして下さった。しかし、このスケールの大きい偉大な指導者も病魔には勝てず、不帰の客となった。平成6年1月12日、葬儀・告別式は仙台葬儀会館・斎苑において行われた。司会者は早稲田教会上林順一郎牧師、奏楽者は仙台五橋教会の渡辺真理さん。賛美歌312・338・405番が荘厳に歌われた。葬儀もさることながら、一族（旧華族）の方々の気品の高さにも圧倒された。いま、板倉勝高先生の御霊は仙台市葛岡霊園1-134番に眠られている。

## エピローグ

平成5年3月、私は還暦を迎え、県教育センターを退職した。其の後、多くの人のご配慮で平成6年4月から聖霊女子短期大学に勤務させて頂いた。それまでも退職後の生活の在り方を些か模索していたが、毎年一度は東北地理学会などで研究発表するよう心掛け、それを実行してきた。本学では研究環境に恵まれ、また、筆者に研究助成・刊行物出版に協力して下さる諸機関もあり、2年間に一冊のペースで、『雄物川の河川交通』『雄物川流域の集落と住民の生活』『羽州街道の変遷』『横手盆地周辺の峠』『雄物川災害誌』などの単行本を刊行し得たことは望外の幸であり、研究者としては誠に冥利に尽きるものである。

私はいま古稀を迎えようとしている。今後いかに過ごすかについて問われることもあるが、些かの迷いもなく、一生、一研究者として過ごす所存である。『秋田県鉾山誌』も間もなく刊行予定である。ここに至ったのは、若い頃からご指導頂いた碩学との邂逅により、その学恩に報いる道と信じ、また、今迄私の研学生活を側面から支えて下さった方々に対する謝意と考えるからである。

※2003年（H. 15）3月「聖霊女子短期大学 友第39号」に掲載されたものです。